

相澤さんによる感想文

2015年7月21日、東京大手町の日経新聞社本社ビルにおいて日経新聞社、中国教育国際交流協会、日本華人教授会主催の「第10回全中国選抜中国日本語スピーチコンテスト」の決勝戦が行われた。中国各地の予選を勝ち抜き7400人の中から東京本戦行きの権利を獲得した16人が最優秀者を定めるべく一堂に会したのである。私たち東京外大中国語科2年生の3人は彼らと日本人学生の交流会を日経新聞社の方々と共に企画運営する機会を得、大会前日学生交流会を開催した。この経験から感じたこと、得たものをまとめたい。

私たちが交流会で意識したことは、この交流会を同世代の学生たちが絆を深める「きっかけ」にすることであった。半日の交流会でお互いのことを正確に理解することは正直難しい。ただ、メディアを通さない生の交流を通して相手国に「知り合い」「友人」を作れば、相手国を見る目もきっとそれまでとは少し変わるはずである。その「きっかけ」の場にしたいと思ったのである。具体的には日中混合チーム対抗でジェスチャーゲームをしたり、グループディスカッションとその成果発表をしたりした。ディスカッションのテーマも恋愛観、芸能関係や学生生活に関するものなど生活に近く話しやすいものを設定しかつ、話題を提供するのみにとどめた。幸い各グループで会話は盛り上がり笑い声も絶えず、交流会は成功を収めたように思う。

翌日行われたスピーチコンテストも見学させてもらったのだが、私はその時の感動を忘れられない。緊張で顔をこわばらせながらもステージの上でライトを浴び堂々と日本語でスピーチを行う学生たちは輝いていた。ただの観客ながら私も一緒に興奮してスピーチ、そして結果発表に聞き入り、入選を果たせなかったことを意味する特別賞として名前が呼び上げられた時には思わず悔し泣きをしそうになり、優秀賞が発表された時には心から拍手を送った。交流会では、「きっとすごく優秀な人たちなのに話してみるとワイワイ盛り上がる普通の若者だな。」と思った。しかし大会当日感じたのは反対で、「私たちと同じ普通の若者なのに、なんでこんなに輝いているのだろう」ということだった。きっとあの輝きは、彼らは日々積んできた多くの努力に裏付けられた自信だったのだと思う。毎日毎日何年も努力を重ねてきたからこそ誇りをもってあのステージに立てているのである。彼らの情熱に感動し、そして、私は自分自身を顧みた。私は彼らのような自信がもてるだろうか？自信が持てるほどの努力をしているだろうか？私は当初、日中両国の絆作りが交流会最大の目的だと思っていた。もちろんそれも果たした。ステージに立つ彼らを「普通の若者」としてとらえられるようになったのはその成果である。しかしもっとも大きな収穫は情熱を持つ学生たちに出会い、刺激をもらえたことだったと思う。テスト期間と重なり交流会の準備は決して楽ではなかったが、彼ら学生たちにこのような形で関わられた幸運に心から感謝したい。

交流会企画者一同を代表して、

国際社会学部 国際社会学科 東アジア地域2年 相澤茜